

## アタヤル語における「朝」の語源について\*

落 合 いずみ

### On the Origin of “Morning” in Atayal

OCHIAI, Izumi

This study discusses the manner in which Atayal (Atayalic subgroup, Austronesian language family) underwent a semantic shift in time expressions such as “a little while ago,” “now, today,” and “morning, tomorrow.” In relation to this, the forms for “yesterday,” “a little while ago,” and “later” are also discussed. In Proto-Austronesian, the meanings of “morning” and “tomorrow” are inseparable, and this form is reconstructed as \*dama. In earlier Atayal, *sasan* meant both “morning” and “tomorrow.” The Atayal form, *sasan*, “morning, tomorrow,” does not reflect \*dama. This study examines the origin of *sasan* in Seediq (Atayalic subgroup), a language closely related to Atayal. In Seediq, the form for “now, today” is *saða*, and it later became *saya*. The *ð* dates back to the Proto-Atayalic \*j; thus, a tentative form in Proto-Atayalic can be reconstructed as \*saja, meaning “now, today.” The Proto-Atayalic \*j is reflected as *g*, *r*, or *s* in Atayal, so \*saja can be reflected as *saga*, *sara*, or *sasa*. The last form, *sasa*, may be related to *sasan* “morning, tomorrow.” It is likely that *-an* was attached, a suffix indicating time or space, resulting in *sasa-an*. Then, one of the *a*’s was deleted from the consecutive vowels, becoming *sasan*. Somehow, its meaning shifted from “now, today” to “morning, tomorrow.” This study proposes that this semantic shift was driven by another semantic shift relating to a Proto-Atayalic form, \**sawni*, which means “a little while ago.” This word extended its meaning to include “today in the morning” and then further extended to refer to “today”; it probably also referred to “now.” As *sawni* became “now, today,” *sasan*, the original word for “now, today,” shifted its meaning to “morning, tomorrow.”

**Keywords:** Atayal, Seediq, morning, tomorrow, today

**キーワード:** アタヤル語, セデック語, 朝, 明日, 今日

\* 本稿は言語記述研究会第115回例会における発表「アタヤル語の『朝』の再建—時に関する語のズレから—」(2021年8月29日オンライン)を基にしたものである。発表の場においてご助言をくださった参加者の方に感謝する。また本稿に対してご助言をくださった査読者の方々に感謝する。本稿における不備は筆者に責任がある。



1. はじめに
2. アタヤル語の「朝」
3. アタヤル語の「明日」
  - 3.1 アタヤル語の「一昨日」と「明後日」
  - 3.2 台湾オーストロネシア諸語の「昨日」と「明日」、「一昨日」と「明後日」、「さっき」と「あとで」
4. アタヤル語の「今日」
5. アタヤル語の「朝」再考：*sasan* の意味の移行
6. おわりに

## 1. はじめに

アタヤル語はオーストロネシア語族アタヤル語群に属する。アタヤル語群には、アタヤル語の他にセデック語が含まれる。アタヤル語もセデック語も台湾において話される言語である。アタヤル語やセデック語のように、台湾先住民族によって話されるオーストロネシア諸語を台湾オーストロネシア諸語と呼び、サイシャット語、ツォウ語、カナカナブ語、サアロア語、アミ語、バサイ語、ブヌン語、ルカイ語、カバラン語、パゼッヘ語、サオ語、パイワン語、プユマ語、バブザ語、パポラ語、ホアニャ語、シラヤ語などの言語が含まれる。なお、台湾の離島である蘭嶼島で話されるヤミ語もオーストロネシア語族に属するが、これは台湾オーストロネシア諸語には含めず、オーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語群に含める。

小川・浅井 1935: 21, 559 によると、アタヤル語には二つの方言があり、セデック語にも二つの方言がある。アタヤル語の二つの方言は、スコレック方言とツォレ方言と呼ばれる。セデック語の二つの方言はバラン方言とトゥルク方言と呼ばれる。本稿は、アタヤル語に主眼を置き、「朝」を表す形式を中心に議論するが、セデック語との同源語を比較することで分析を深める。

アタヤル祖語において「朝」を表す形式は未だ再建されていない。一方、Ochiai 2019 はセデック祖語において「朝」を表す形式を再建しているが、その形式である \**caman* は、「朝」のみ表すのではなく、「朝」と「明日」の両者の意味が不可分であることを述べている。さらに、\**caman* は \**cama-n* と分節されることを示唆している。時間・空間を表す接尾辞 *-an* が付加して \**cama-an* となったのちに、連続する *a* が一つ脱落して \**cama-n* となった<sup>1)</sup>。そして、この語根 \**cama* はオーストロネシア祖語 \**dama* 「朝・明日」に遡る。

アタヤル語の「朝」及び「明日」の形式はこのオーストロネシア祖語 \**dama* に由来しない。Egerod 1980: 597 のアタヤル語スコレック方言辞典によると、アタヤル語の「朝」は *sasan* という形式であり、「明日」は *suxan* という形式である。それより 45 年早い小川・浅井 1935: 付録 15 のアタヤル語スコレック方言語彙集によると *sasan* は「明日」の項目に挙げられている（この語彙集の項目に「朝」は無い）。これを基に、Ochiai 2019: 141 はアタヤル語の *sasan* も早期には「朝」と「明日」を表したと分析している。

本稿では、Ochiai 2019: 141 におけるアタヤル語の *sasan* という形式について、早期のアタヤル語資料である『蕃族調査報告書』の語彙集 佐山 1983a, 1983b [初出 1918, 1920] を用い、そこに挙げられた 24 の集落における「朝」とそれに関連した「明日」と「今日」形式を比較することで、形式的・意味的分析を更に深める。そして未だ再建されていないアタヤル祖語の

1) 接尾辞の *-an* が付加していることは小川 1939: 8 における分析の表し方 *saman* < *sama-an* から読み取れる。本稿では *s* を *c* と表記する。

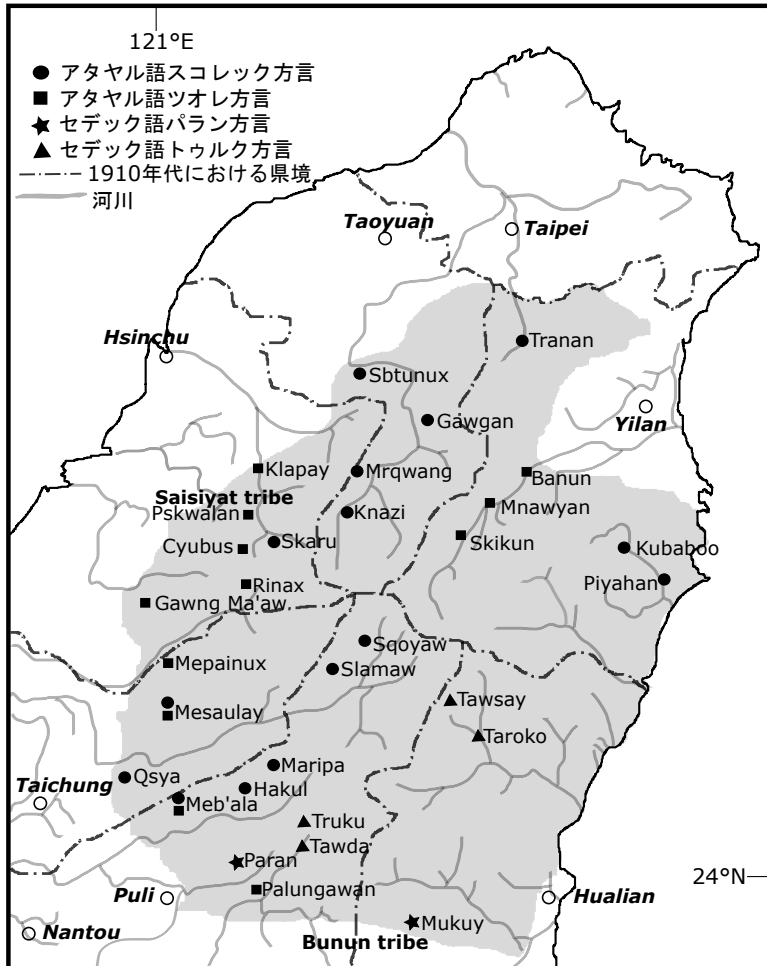


図1 アタヤル集落の分布

「朝」の形式を再建する。アタヤル語に生じた時を表す表現の時間的ズレについても議論する。

図1では議論に登場するアタヤル集落の位置を示した。セデック集落の位置も載せている。この図は森 1917, 佐山 1983a [初出 1918], 移川他 1935, 李 1996 における地図や記述を基に、本稿筆者が作成した。

表1は佐山 1983a, 1983b [初出 1918, 1920] に挙げられた、24の集落において収集されたアタヤル語の「朝」「明日」「今日」の形式である。集落名の後ろに(S)または(C)と記したのは方言の別である。(S)はスコレック方言が話される集落であること、(C)はツオレ方言が話される集落であることを示す。両方の方言が話される場合は(C, S)と記した。また、佐山 1983a, 1983b [初出 1918, 1920] において形式はカタカナで表記されている。それが各欄の一行目に示されている。佐山のカタカナ表記を、音韻的類推により本稿筆者がローマ字表記に書きなおしたものが各欄の二行目に示されている。以下にローマ字表記に直した際の基準について簡潔に述べる。

1. アタヤル語において母音、子音とも長短は弁別の特徴ではない。そのため「朝」の項目における「ササン」、「サッサン」、「サーサン」などは全て *sasan* と表記した。

表1 早期アタル語の「朝」, 「明日」, 「今日」

集落名	朝	明日	今日
Sbtunux (S) 大嶽炭蕃	ササン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Gawgan (S) 合歡蕃	サッサン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Sqoyaw (S) 司加耶武蕃	ササン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	レヤフカニ <i>riyax qani</i>
Slamaw (S) 沙拉茅蕃	ササン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	キラ, ソーニ <i>kira, soni</i>
Hakul (S) 白狗蕃	サッサンスーハン <i>sasan suxan</i>	スーハン <i>suxan</i>	レヤフカニサウネ <i>riyax qani sawni</i>
Kubaboo (S) 南灣蕃クバボー社	サーサン <i>sasan</i>	---	---
Piyanan (S) 溪頭蕃ピヤナン社	ササン <i>sasan</i>	ショハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Skaru (S) 舎加路蕃	ササンソニ <i>sasan soni</i>	ササン <i>sasan</i>	ソーニ <i>soni</i>
Knazi (S) 葇拿餌蕃	サッサン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サオニ <i>sawni</i>
Tranan (S) 屈尺蕃	サッサン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Piyahan (S) 南灣蕃ピヤハン社	サーサン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Qsya (S) 南阿冷社	ササン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ, キラ <i>sawni, kira</i>
Mesaulay (C, S) 南勢蕃	ササン <i>sasan</i>	シューカン <i>suxan</i>	ソニ <i>soni</i>
Meb'ala (C, S) 眉原蕃	ササン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Mepainux (C) 北勢蕃	サーサン <i>sasan</i>	スーカン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Palungawan (C) 萬大蕃	サッサン <i>sasan</i>	ツハン <i>cuxan</i>	ショニ <i>soni</i>
Skikun (C) 溪頭蕃シキクン社	サーネック <i>saniq</i>	ソハン <i>cuxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Mnaywan (C) 溪頭蕃マナウヤン社	サーネック <i>saniq</i>	ソハン <i>cuxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Klapay (C) 加拉夕蕃	ササン <i>sasan</i>	スーハン <i>suxan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Pskwalan (C) 巴思誇蘭蕃	ササンソニ <i>sasan soni</i>	ササン <i>sasan</i>	ソーニ <i>soni</i>
Cyubus (C) 鹿場蕃	ササナン <i>sasanan</i>	ササン <i>sasan</i>	サウニリヤフ <i>sawni riyax</i>
Rinax (C) 汶水蕃	ササナン <i>sasanan</i>	サーサン <i>casan</i>	サオニ <i>sawni</i>
Gawng Ma'aw (C) 大湖蕃 <sup>2)</sup>	サッサン <i>sasan</i>	サッサン <i>sasan</i>	サウニ <i>sawni</i>
Banun (C) <sup>3)</sup> 溪頭蕃バヌン社	サッサン <i>sasan</i>	ジョーハン <i>cuxan</i>	レヤフカニ, ソーニ (朝), キラ (午後) <i>riyax qani, soni, kira</i>

2. [s] に対しての [e], または [s] に対しての [j] も弁別的な分節音ではない。そのため、「明日」の項目における「スーハン」と「ショハン」はともに *suxan* と表記した。
3. Mesaulau 集落に「シューカン」, Mepainux 集落に「スーカン」との表記が見られる。これら表記における語中の「カ」における子音は, *x* を表そうとしたものとする。これら集落において語彙を収集した記録者は日本語に見られない音素 *x* を表すために, カタカナにおいて子音 *k* から始まる文字「カ」を用いたと考えられる。少なくとも調音位置は同じく軟口蓋である。これ以外の集落では, *xa* を表すのに, カタカナにおいて子音 *h* から始まる文字「ハ」が用いられる<sup>4)</sup>。
4. 佐山 1983a [初出 1918] では「ツ」の上に傍線が引かれた特殊な表記が, Skikun 集落と Mnawyan 集落の「明日」を表す形式である「ツハン」に見られるが, 一文字目は [tsu] を表したかったと判断した。この時代のアタル語において, 母音 *u* と *o* は弁別的ではなく, 音素としては /u/ であることから, 括弧内の推定音価に記したように *u* で表記した。
5. この *cuxan* はいくつかのツオレ方言の形式に見られるが, *c* [ts] についてその有声性は弁別的ではない。なぜなら, Li 1981: 237 におけるアタル語の音素項目を見ると, *c* [ts] に対応する有声の [ɬ] は, アタル語における音素として存在しないからである。Banun 集落では語頭子音の *c* が有声であることを示すような形式「ジョーハン」として挙げられているが, これも *cuxan* と音声的に同じものとして扱う。

ちなみに, アタル語では比較的最近になり, 本来の二重母音 *aw* が *o* に変わる変化が起きたため, *o* が音素として取り入れられるようになった。この変化が途上にあったことは表 1 の「今日」の項目に見て取れる。二重母音 *aw* を保った *sawni* を持つ集落もある一方で, 二重母音 *aw* が *o* に変化した *soni* を持つ集落もある。佐山 1983a, 1983b [初出 1918, 1920] における集落名の表記は漢字などを用いており, 読み方が難解なものが多いため, ローマ字表記の集落名に直した。佐山 1983a, 1983b による集落名の表記は, ローマ字表記の下に示した。

## 2. アタル語の「朝」<sup>5)</sup>

まず, アタル語の「朝」について見る。表 1 によると, 「朝」の形式として *sasan* が最も

- 2) 佐山 1983b において大湖蕃は太湖蕃とも書かれる。
- 3) Banun 集落について, 移川他 1935 ではスコレック方言に分類されているが, 表 1 に挙げられた形式 *cuxan* はツオレ方言であることを示すため, ツオレ方言に分類した。
- 4) これとは逆に本来の *k* が *x* として表記される例はセデック語において語末に散見される。Ochiai 2018: 138-139 は鳥居 1900, 鳥居 1901 において記録されたセデック語パラ方言の表記において, 現代セデック語パラ方言では *k* で示されるべき語に *x* (鳥居の表記は *h* だが, 共に軟口蓋という調音点から考えて *x* の可能性が高い) が用いられることがあると述べる。例えば, 鳥居の記録した *gepu*<sup>3m</sup> 「弁当箱」は, 現代では *gepuk* である。アタル語群において *x* と *k* の間に揺れが見られることがあったのかもしれない。
- 5) 筆者の調査によるとアタル語スコレック方言の音素目録は母音が /a i u ə e o/, 子音が /p b t k g q ʔ s x h r l m n ŋ y w/ である。*b* は [β], *g* は [ɣ], *r* は [r] である。*r* は母音 *i* の前では [ɹ] で現れる。Huang 1995: 16-17 によるとアタル語ツオレ方言 (Rinax 集落) では母音に /ə/ が無く, 子音に /ʔ/ が加わる (本稿では *c* で表記する)。また, セデック語パラ方言の音素目録は筆者の調査によると, 母音が /a e i u o/, 二重母音は /uy/ のみ, 子音が /p b t d ʔ k g q s x h m n ŋ l r w/ である。*r* は [r] に, *y* は [j] に相当する。月田 2009: 56-62 によるとトゥルク方言の母音は単母音が /a i u ə i/, 二重母音が /aw ay uy/ であり, 子音は /ʔ/ が無い以外はパラ方言と同じである。また, 月田によるとトゥルク方言において *l* は [ʃ], *g* は [ɣ] に相当する。

多く見られることがわかる。この由来については5節で振り返る。以下、それ以外の形式で現れるものを見る。

Skikun 集落と Mnawyan 集落では *saniq* という形式である。この形式は *sasan* に由来すると考えられる。小川・浅井 1935, Li 1985, 落合 2020 などによると、アタヤル語群には化石接尾辞の付加という特殊な音韻的かつ形態的操作がいくつかの語に対して見られる<sup>6)</sup>。*saniq* も化石接尾辞が付加した形式と考えられる。これは *sasan* に対し、化石接尾辞の *-iq* が付加して、*sasaniq* になった後、次々末音節の *sa* が脱落したと考えられる。接尾辞 *-iq* が付加する例は、例えば Li 1982: 293 に挙げられている Rinax 集落の *sisil-iq* 「画美鳥の一種」であり、この同源語としてセデック語の *sisil* が挙げられている。また Egerod 1980: 623 において、*siliq* がスコレック方言の形式として挙げられているが、この *siliq* という形式は、*sasaniq* から *sa* が脱落して *saniq* になったと考えられるように、*sisil-iq* から次々末音節の脱落した形式と考えられる。

さらに、Cyubus 集落と Rinax 集落において *sasanan* という形式も見られる。Egerod 1980: 28 によると、アタヤル語には *-an* という接尾辞があり、時間・空間を表すとしている。*sasan-an* という形式は *sasan* に対し、時間・空間を表す接尾辞 *-an* が付加した形式と考えられる。ちなみに、Egerod 1980: 28 では、*sasan* 自体、*-an* を含んだ形式として挙げている。5節で述べるように、*sasan* は *\*sasa-an* という形式に由来し、語根 *\*sasa* と接尾辞 *-an* の境界に生じた母音連続 *aa* のうち一つが脱落した形式 (*sasan*) である。同様に語根末が *a* で終わる語根に、接尾辞 *-an* が付いて同音脱落が起きた類例がセデック語に見られる。しかも、意味も同様に「朝・明日」を表すものである。1節でも述べたように Ochiai 2019 によるとセデック語の「朝・明日」は *caman* であり、これは *cama-an* に由来する。

ということは、Cyubus 集落と Rinax 集落における形式 *sasa-n-an* (< *\*sasa-an-an*) には、二重の *-an* が含まれることになる。恐らく *sasa-n* は、接尾辞が付いた形式として認識されなくなり、単純語として認識されるようになった後で、さらに *-an* が付加したと考えられる。Cyubus 集落において *sasa-n* は「明日」にも使われる形式であるため、「朝」との形式的な区別をするために、「朝」のほうにさらに *-an* を付加した可能性がある。Rinax 集落においても、「朝」に対してさらに *-an* を付加する同様の変化が起きたと考えられるが、Rinax 集落では「明日」を表す形式は *sasa-n* ではなくて、*casa-n* である。これは語頭子音が原因は不明であるが *s* から *c* に変わったものと思われる。

Hakul 集落では *sasan suxan* という形式が見られる。二つ目の語 *suxan* は表1の「明日」の項目に多く見られる形式である。Hakul 集落の「明日」も *suxan* である。そのため、*sasan suxan* は「明日の朝」を表す表現であると考えられる。

そして、Skaru 集落と Pskwalan 集落では *sasan soni* という形式が見られる。二つ目の語 *soni* は、表1の「今日」の項目に多く見られる形式である。Skaru 集落と Pskwalan 集落の「今日」も *soni* である。そのため、*sasan soni* は「今日の朝」を表す表現であると考えられる。

### 3. アタヤル語の「明日」

表1において、アタヤル語の「明日」に多く見られる形式は *suxan* または *cuxan* である。

6) 小川・浅井 1935 はアタヤル語についてのみ特殊な接尾辞が見られるとし、Li 1985 はアタヤル語・セデック語の両方に特殊な接尾辞が見られるとする。この特殊な接尾辞を落合 2020 は化石接尾辞と呼ぶ。

前者はスコレック方言とツオレ方言を話す集落の両方に見られる形式であり、後者はツオレ方言を話す集落のみに見られる形式である。Li 1981: 260 によると、アタル語群祖語の子音 \*c はアタル語スコレック方言と、一部のアタル語ツオレ方言の下位方言において s に変わった。その他のツオレ方言の下位方言では c で保たれている。これに従って、Ochiai 2021 はアタル祖語の「明日」を表す形式を \*cuxan と再建した。そのため *suxan* という形式においては語頭子音が c から s に変わったことになる。

この \*cuxan の成り立ちについて、Ochiai 2021: 59–62 はアタル語群祖語において数詞「一」を表す非独立系の形式である \*xa から派生された、つまり、*cu-xa-n* と分節されると述べる。また、接尾辞として現れる -n は、時間・空間を表す接尾辞 -an であったろうとする。*cu-xa-an* が作られた後で、連続する二つの母音 a から一つが脱落して *cu-xa-n* となった。接頭辞として現れる *cu-* はその機能がわからないが、「明日」は、「今日」から「一日」経った日という考えで、「一」を表す語から「明日」の形式を派生させたのだろう、と述べている。

セデック語に、アタル語の \*cuxan と類似の形式が見られることに気が付いたので、本稿では以下で比較する。「かつて一度」という意味を表す語であるが、筆者の調査によるとセデック語パラ方言では *cuxan* または *cuuxan* という。Rakaw 他 2006: 747–745 によるとトゥルク方言では *səuxal* という。これらから再建されるセデック祖語の形式は \*cə-u-xa-l となる。セデック語トゥルク方言の *səuxal* という形式の語頭に見られる sə は、過去を表す接頭辞であると分析できる。そして、セデック語パラ方言では子音部分が c であるため、セデック祖語における接頭辞は \*cə- と再建される。セデック語パラ方言からさらに例を挙げると、*c-iga* 「昨日」、*cu-mu-kaxa* 「一昨日」、パラ方言 *cu-beyo* 「以前」などの語があり、これら過去を表す時の表現には共通して接頭辞 *cV-* が見られる（但し *c-iga* の場合は *cV-* における母音が脱落している）。パラ方言においてアクセントがおかれる次末音節より前の音声的に弱い音節では母音が u に変化するが、この弱化母音は、アタル語やセデック語トゥルク方言では曖昧母音である。そのため接頭辞 *cV-* は \*cə- に遡るといえる。

セデック祖語の \*cə-u-xa-l 「かつて一度」において過去を表す接頭辞 \*cə と「一」を表す語根 \*xa の間に入っている u が何であるかは分からない。語末に見られる \*-l は回数を表す接尾辞である。これはオーストロネシア祖語 \*N に遡る形式である<sup>7)</sup>。早期セデック語パラ方言は *səuxal* であったと考えられる。第一音節の曖昧母音が直後に続く母音 u に同化し、*cuuxal* になりその後、語末子音が n に変わり *cuuxan* になったのだろう。さらに、連続する二つの母音 u から一つ脱落して *cuxan* という自由交替形も生じた。

アタル祖語の \*cuxan 「明日」が、セデック祖語の \*cə-u-xa-l 「かつて一度」と類似した成り立ちだとすれば、\*cə-u-xa-an と分節しなおすことができるかもしれない<sup>8)</sup>。これが正しければ過去を表す接頭辞である \*cə- が付いている。そこから接頭辞の母音が脱落し (\*c-u-xa-an)、連続する二つの a から一つ脱落し、\*c-u-xa-n となったと考えられる。繰り返しになるが、類似の同音脱落は、セデック語の「朝・明日」にも見られ、Ochiai 2019 によるとセデック語「朝・明日」*caman* は *cama-an* に由来する。

アタル祖語の \*cuxan 「明日」とセデック祖語の \*cə-u-xa-l 「かつて一度」の形式上の違いは、セデック祖語では接尾辞が \*-l (回数を表す) であるのに対し、アタル祖語では \*-an (時

7) このオーストロネシア祖語の形式は Zeitoun et al. 2010: 875–876 によって「recurrence 繰り返し」を表す接尾辞としてオーストロネシア祖語に再建された。本稿では「回数」を表すとした。

8) 語尾に接尾辞の -an を含むことは、Ochiai 2019: 61 が述べている。

間・空間を表す)である。仮にこの成り立ちが正しいとして、アタル祖語において不思議な点は、現在からみて未来のことを表す「明日」という語に対し、過去を表す接頭辞 \*ca- が付いていることである。そうだとすれば、過去と未来が錯綜しているように感じられる。なぜ過去を表すことが期待される語が未来を表すのかは不明だが、関連が示唆されるのは以下 3.1 節に述べるようにアタル語において、*məkaxa* (今から一日隔った日)が一昨日という過去も明後日という未来も表すという点である<sup>9)</sup>。アタル祖語の \*cuxan は元々過去を表す語、例えば昨日を表す語であったかもしれないが、それが未来の「明日」を表す語にもなり得たのだろう。そして過去を表す意味の方が失われたと考えられる<sup>10)</sup>。

### 3.1 アタル語の「一昨日」と「明後日」

この点に関連して、Ochiai 2021: 61–62 には、早期アタル語では「一昨日」と「明後日」の形式に区別が無く、どちらも *mə-ka-xa* という形式で表していただろうと指摘している。この形式も語根 *xa* 「一」に対し、接頭辞的要素である *ka-* と *me-* を付加することで派生されたものであると述べている。どちらの要素も機能は不明である。今日を中心として「一日」隔てた日、という概念を表すと考えられ、これが未来の文脈で使われる場合は「明後日」、過去の文脈で使われる場合は「一昨日」を表したのだろう。アタル語では今日を基準とし、過去・未来にとらわれず、どれだけ時間的隔たりがあるかが重要なようである。

さらに、小川 1939 が観察するように、台湾オーストロネシア諸語において、現在を境にした過去と現在に同じ語根を用いていることが多く、過去と現在は接辞によって区別される。このことについて 3.2 節で概観する。

### 3.2 台湾オーストロネシア諸語の「昨日」と「明日」、「一昨日」と「明後日」、「さっき」と「あとで」

小川 1939: 10–13 は、台湾オーストロネシア諸語全般に現在を境にした過去と現在に同じ語根を用い、接辞によって過去と現在を区別するという傾向が見られると述べている。「昨日と明日、一昨日と明後日は普通同一の語<sup>11)</sup>を用ひ、接頭語によつて之を區別してゐる…」と述べる<sup>12)</sup>。さらに「先刻」と「後刻」を表す語についても「此の兩語も亦多くは同一語を用ひ、接頭語によつて過去と未來を區別する」と述べるが、どの言語がそうであるかについて詳細に述べられていない。小川が付録として挙げた表から、「昨日」と「明日」、「一昨日」と「明後日」、「さっき」と「あとで」のそれぞれにおいて同一の語根を用いている場合を特定し、3.2.1 節では台湾オーストロネシア諸語の「昨日」と「明日」、3.2.2 節では台湾オーストロネシア諸語の「一昨日」と「明後日」、3.2.3 節では台湾オーストロネシア諸語の「さっき」と「あとで」を概観する。なお、小川 1939 の表記に多少の変更を加えた。

#### 3.2.1 台湾オーストロネシア諸語の「昨日」と「明日」

小川 1939 が、「昨日・明日」について同一の語根を用いているとする例は、ツォウ語の *ne-ho-tsuma* 「昨日」と *ho-tsuma* 「明日」、カナカナブ語の *mija-ūra* 「昨日」と *nu-ura* 「明日」、ル

9) 語根 *xa* に関し、今からの数え方が \*cuxan (1つとなりの日、明日) と *məkaxa* (1つ隔てた日、一昨日・明後日) で異なる点は興味深い。

10) ちなみに、アタル語群祖語において「昨日」を表す語は Li 1981: 297 によって \*cu-gig'a? と再建されている。

11) 本稿で言うところの「語根」に相当する。

12) 本稿で言うところの「接頭辞」に相当する。



カイ語の *haku-si?a* 「昨日」と *si?a* 「明日」、またはルカイ語の別の形式の *ko-?aa* 「昨日」と *lo-?aa* 「明日」、プユマ語の *a-dama-n* 「昨日」と *an-dama-n* 「明日」、アミ語の *ina-tsi:ia* 「昨日」と *ano-tsi:ia* 「明日」である。この中でツォウ語とプユマ語の形式はオーストロネシア祖語 \**dama* 「朝, 明日」に由来する。つまり、「明日」から「昨日」が派生されている。それに対し、Blust and Trussel 2010 によると、アミ語の形式はオーストロネシア祖語 \**siRa* 「昨日」に由来する。つまり、「昨日」から「明日」が派生されている。

### 3.2.2 台湾オーストロネシア諸語の「一昨日」と「明後日」

小川 1931 は「一昨日・明後日」について同一の語根を用いているとする例を列挙していないが、付録として挙げられた表から特定すると以下になる。アタル語の *mükaxa kawajal* 「一昨日」と *mükaxa* 「明後日」<sup>13)</sup>、セデック語の *sü-mükaxa* 「一昨日」と *mükaxa* 「明後日」、サイシャット語の *kaha-kare?al* 「一昨日」と *kare?al* 「明後日」、ツォウ語の *ne:se:hu* 「一昨日」と *se:hu* 「明後日」、カナカナブ語の *maja-tanijarü-utsani* 「一昨日」と *nu-tanijarü-utsani* 「明後日」、ルカイ語 *hako-paülüla* 「一昨日」と *paülüla* 「明後日」、またはルカイ語の別の形式の *ko-mi-aijaa* 「一昨日」と *lo-mi-aijaa* 「明後日」、パイワン語の *ta-sika-cülu* 「一昨日」と *nu-sika-cülu* 「明後日」、プユマ語の *a-da.ma-n* 「一昨日」と *an-da.ma-n* 「明後日」、アミ語の *ina-tsi:ia* 「一昨日」と *ano-tsi:ia* 「明後日」、パゼツへ語の *uka-xe-doa* 「一昨日」と *xe-doa* 「明後日」、タオカス語の *tagamiad* 「一昨日」と *mahu-tagamid* 「明後日」である。ちなみに台湾オーストロネシア諸語ではなくて、マラヨ・ポリネシア語群に属するが、台湾の離島で話されるヤミ語の例もあり、*kami-na-sa|au* 「一昨日」と *mukti-sa|au* 「明後日」である。アミ語とプユマ語は「昨日」「明日」の形式における語根の次末音節を長母音にすることで「一昨日」「明後日」を造っている。

また、小川 1939: 11 によるとパイワン語の形式における語根 *cülu* は数詞の「三」を表し、パゼツへ語の形式における語根 *doa* は数詞の「二」を表すとしている。ということは言語によって、「一昨日」「明後日」の数え方が異なっていることになる。アタル語群は「一」（今日から一日隔てた日の意か）から、パゼツへ語は「二」（今日を除いて今日から二日目の意か）から、パイワン語は「三」（今日を含めて今日から三日目の意か）からの派生である。

### 3.2.3 台湾オーストロネシア諸語の「さっき」と「あとで」

小川 1931 は「先刻・後刻」について同一の語根を用いているとする例を列挙していないが、付録として挙げられた表から特定すると以下になる。プヌン語の *şana:n* 「先刻」と *şana:n-in* 「後刻」、ルカイ語 *ko-sa-an-ü* 「先刻」と *lo-sa-an-ü* 「後刻」、パイワン語の *ta-sauni* 「先刻」と *nu-sauni* 「後刻」、プユマ語の *a-varüm-ai* 「先刻」と *an-varüm-ai* 「後刻」、アミ語の *e-honi* 「先刻」と *ano-honi* 「後刻」。

小川 1939: 13 には「先刻」と「後刻」に同じ語根を用いる語の例として、*sauni* 型を挙げているが、これは Blust and Trussel 2010 におけるオーストロネシア祖語の \**Sauni* 「すぐに、即座に、あとで」に相当する形式である。小川 1939: 13 において *sauni* 型に含まれる形式として挙げられたのは、パイワン語の *sauni* やアミ語の *honi* である。アタル語の *sawni* も含ま

13) 小川 1939 において、アタル語の *mükaxa kawajal* 「一昨日」における *kawajal* は接尾辞として分析され、ハイフンで前の語と繋がっているが、これは接尾辞ではなくて語である。小川 1931: 63 ではこれらが二つの語に分割され、*mökaxa kə-wajal* となっている。*kə-wajal* の語根 *wajal* は、小川 1931: 24 に「去る」の意味で挙げられている。

れているがこれは小川 1939 の付録から「先刻」のみを意味することが明らかである。次の 3.2.4 節で述べるように、アタヤル語群では「さっき」と「あとで」は異なる形式で表す。

### 3.2.4 アタヤル語の「さっき」と「あとで」

アタヤル語スコレック方言で「さっき」は *sawni* (小川 1931: 147) であり、原住民委員会 2013 によるとアタヤル語ツオレ方言 Rinax 集落で *sawni* である。筆者の調査によるとセデック語パラソ方言で「さっき」は *soni* であるが、落合 2015: 395 によると早期の形式は *sawni* である。Rakaw 他 2006: 812 によるとセデック語トゥルク方言では *soni* である<sup>14)</sup>。これらから再建されるアタヤル語群祖語の形式と意味は \**sawni* 「さっき」となる。

アタヤル語スコレック方言で「あとで」は *kira* であり、アタヤル語ツオレ方言では Li 1981: 258 によると *kisa* または *kira* である<sup>15)</sup>。どちらの方言でも「あとで」は「さっき」とは異なった語根を用いている。語中子音は *s* か *r* かで現れるが、このような分布を示すアタヤル祖語は Li 1981: 258 において \**g'* と再建され、さらにオーストロネシア祖語へ遡っても \**g'* であるとする。この音素は Blust 2013: 578 における \**j* に相当する<sup>16)</sup>。Blust 2013: 578 ではオーストロネシア祖語の \**j* はアタヤル語において *s* または *r*、さらには *g* で反映されると述べている。「あとで」についてアタヤル祖語を再建するなら \**kija* となる。

筆者の調査によるとセデック語パラソ方言で「あとで」は *kiya* である。ただし、この早期の形式は *kiða* である<sup>17)</sup>。Rakaw 他 2006: 371 によるとセデック語トゥルク方言でも *kiya* である。これらから再建されるセデック祖語の形式は \**kiða* となる。そして、アタヤル祖語の \**kija* とセデック祖語の \**kiða* から再建されるアタヤル語群祖語は \**kija* である。

## 4. アタヤル語の「今日」

表 1 においてアタヤル語の「今日」として多く見られる形式は *sawni*、またはその形式中の二重母音 *aw* が *o* に変わったと考えられる *soni* である。この形式は 3.2.4 節で見たように、「さっき」を表す形式である。これは表 2 にあるように、アタヤル語群祖語でも、アタヤル祖語でも「さっき」を表す表現であった。つまり、アタヤル語において、*sawni* は本来の「さっき」の意味の他に、「今日」の意味を持つに至ったことになる。

このような意味拡張が起きた背景として Banun 集落が示唆に富んだ形式と意味を挙げている。*soni* は「(今日の) 朝方」、*kira* は「(今日の) 午後」に用いる形式であるとしている<sup>18)</sup>。「(今日の) 朝方」は \**sawni* 「さっき」に由来する形式、「(今日の) 午後」は表 2 にある \**kija* 「あとで」に由来する形式である。ちなみに、Slamaw 集落と Qsya 集落では「今日」として *soni/sawni* と *kira* の両方が挙げられているが、これは恐らく Banun 集落と同様に前者が「今日の朝方」後者が「今日の午後」を表していたのだろう。

14) トゥルク方言の形式において次末音節に期待される母音は *aw* であるが、何故か *u* で現れる。

15) Li 1981: 258 における表記は *kiða*? または *kira*? 並びに *kisa*? であるが、本稿ではこれらを *kira* と *kisa* に変更した。

16) Blust 2013: 578-579 によると、\**j* は何らかの音声阻害音であったらうとのことである。

17) *kiða* であったことを示唆する表記が鳥居 1901: 134-135 に見られ、そこでは *kiza* として挙がっている。

18) Egerod 1980: 649 にも、アタヤル語スコレック方言の *soni* (Egerod は *soni*? と表記) と *kira* (Egerod は *kira*? と表記) について同様の記述が見られる。そこでは *soni* は今日 (現時点まで) を表し、一方 *kira* は残りの今日を表すとする。

表2 アタヤル語群祖語の「さっき」と「あとで」

	さっき	あとで
アタヤル祖語	*sawni	*kija
スコレック方言	sawni	kira
ツオレ方言	sawni	kisa, kira
セデック祖語	*sawni	*kiða
パラン方言	soni (< sawni)	kiya (< kiða)
トゥルク方言	sunì	kiya
アタヤル語群祖語	*sawni	*kija

図2 sawni の意味的拡張

さっき → さっき, 今日の朝方 → さっき, 今日の朝方, 今日

Banun 集落, Slamaw 集落, Qsya 集落のデータが示唆するのは、本来「さっき」を意味する *sawni* は「(今日の) 朝方」を意味する語としても使われるようになる意味拡張が起き、そして多くのアタヤル集落では、それがさらに「今日」全体を指す語としても使われるようになる意味拡張が起きたということである。図2に意味的拡張を図式化した。

アタヤル語の「今日」の形式として表1にはこの他にも、*riyax qani* という形式が Sqoyaw 集落と Banun 集落に見られるが、*sawni* に比べて出現率はかなり低い。これは小川 1939: 10 によると「この日」という言い表し方である。小川 1931 によると、*riyax* が「日」で *qani* が「これ、この」を表す。分析的な意味の組み合わせであり、しかも名詞句というより複雑な構造を持つことから、後の時代になって改新された形式であることが推察される。

Hakul 集落では *riyax qani sawni* という形式であるが、これは「朝方 *sawni*」の「今日 *riyax qani*」を示したかったと考えられる。また、Cyubus 集落では *sawni riyax* であるが、これは「(今日 *riyax*)」の「朝方 *sawni*」を示したかったと考えられる。

### 5. アタヤル語の「朝」再考：*sasan* の意味の移行

表1で示したように、アタヤル語で多くの集落に見られる「今日」の形式は *sawni* であり、これは前節でみたように「さっき」からの意味拡張によるものであった。この意味拡張によって、本来「今日」を表していた形式の意味がずれ、「朝・明日」を表すようになったと考えられる。本節ではこの意味の移行について述べたい。そのために、まずはセデック語の「今日」を検討する。

筆者の調査によるとセデック語パラン方言の「今日」は「今」も表す語であり、*saya* という形式である。そして小川・浅井 1935: 付録 15 において、早期のセデック語パラン方言では *saða* と記録されている。Pecoraro 1977: 242 によると、セデック語トゥルク方言の「今、今日」は *sayan* である。これらから再建されるセデック祖語は \**saða* となる。セデック語トゥルク方言には *saya* 「調理のために湯を沸かす」という形式があり<sup>19)</sup>、これとの同音衝突を避けるために「今」の形式 *saya* の語末に子音 *ŋ* を加えて両者を形式的に区別したと考えられる<sup>20)</sup>。

19) *saya* 「調理のために湯を沸かす」の形式は Rakaw 他 2006: 739 から引用した。

20) 査読者から同音衝突回避の根拠を示すようにとの指摘があった。セデック語内部において類例が多く見られるかどうかを問うているのだろうが、管見の限り類例は見られない。また、子音 *ŋ* を付加する蓋然性を示すようにとの指摘もあった。これも管見の限り同音衝突を避けるために語末に *ŋ* を付加するといった類例は見られない。

表3 セデック祖語の「今・今日」

セデック語パラソ方言	<i>saya &lt; saða</i>
セデック語トゥルク方言	<i>sayan</i>
セデック祖語	<i>*saða</i>

セデック祖語の形式 *\*saða* から、仮にアタル語群祖語を再建するなら語中の表2に示したようにセデック祖語 *\*ð* はアタル語群祖語 *\*j* (これはオーストロネシア祖語の *\*j* に遡る) に遡るので、*\*saja* となる。そして4節で述べたように Blust 2013: 578 によるとオーストロネシア祖語の *\*j* はアタル語において *g, r* または *s* で現れるので (それぞれが現れる条件はわかっていない)、仮のアタル語群祖語 *\*saja* が、アタル語で反映されたなら *saga, sara* または *sasa* になるはずである。この三つの可能な反映形の中、*sasa* に注目してみる。

2節でみたように、アタル語の「朝・明日」は *\*sasan* と再建されうると考えられる。「今・今日」を表す仮のアタル語群祖語として *\*saja* が再建されるが、アタル語の *\*sasan* 「朝・明日」は、*\*saja* のアタル語における反映形として可能な形式である *sasa* に形式的に似ている。2節ですでに述べたように、この可能な反映形 *sasa* に対し、時間・空間を表す接尾辞 *-an* が付いて *sasa-an* が生じたと考えられる。アタル語の「朝・明日」と同様に、*-an* が付いた類例がセデック語に見られる。しかも、意味も同様に「朝・明日」を表すものである。Ochiai 2019 によるとセデック語の「朝・明日」は1節と3節で述べたように、*caman* であり、これは *cama-an* に由来する。

そして連続する二つの *a* から一つが脱落して *sasa-n* になったのではないか。また、本来の「今・今日」の意味から、「朝・明日」へ意味の変化も生じたと考えられる。これら三つの仮定が正しいとすれば、アタル祖語において「今日 (そしてセデック語のように恐らく「今」も)」を表した語は *\*sasa* であったと考えられる<sup>21)</sup>。

アタル祖語の *\*sasa* が「今・今日」から「朝・明日」へ意味が移行したのは、アタル祖語の *\*sawni* が「さっき」から「さっき・今日」へと未来へ意味を拡張したことがきっかけであったと考えられる。「今・今日」の意味を *\*sawni* に占められることになった *\*sasan* は、それより未来を表す「朝・明日」へ移行したのだろう。それでは、アタル祖語において本来「朝・明日」を表した形式は何であったかという、失われてしまったようなので不明である。ただ、セデック祖語 *\*cama-n* とそれが遡るオーストロネシア祖語 *\*dama* から、アタル祖語では *\*dama* という形式であったのではないかと推察できる。アタル語における時に関する表現の意味の拡張・移行について表4にまとめた。なお、アタル祖語の時代内部において変化が起こったことを想定し、アタル祖語を早期と後期の二つに分けた。セデック祖語とアタル祖語早期から再建されうるアタル語群祖語の形式も示した。

アタル語について辞書が編纂されているのは主にスコレック方言の方である。小川 1931 と Egerod 1980 のアタル語スコレック方言辞典から、各時代における「さっき」、「今・今日」、「朝・明日」の形式も示した。小川 1931 において「今」と「今日」は別の形式を用いる。*sawni* は「今日」の意味として残り、*misuw* という形式が「今」を表す語として登場する。こ

21) 一連の変化は時を表す語の形式・意味の枠内で起きている。しかも、一つの変化が別の変化を引き起こすという連鎖的变化が起こっている。このような連鎖的变化が起きた類例はアタル語群の身体部位を表す語に見られる。落合 2020 によると、アタル語群において本来「手」を表す語が「五」を表すようになり、その後、本来「肩」を表した語が「手」を表すようになった。

表4 アタル語における時に関する表現の意味の拡張・移行

	アタル語群 祖語	セデック祖語	アタル祖語 早期	アタル祖語 後期	アタル語 スコレック方言 (小川 1931)	アタル語 スコレック方言 (Egerod 1980)
さっき	*sawni	*sawni	*sawni	*sawni	<i>sawni</i>	<i>misan</i>
今・今日 <sup>22)</sup>	*saja	*saða	*sasa	*sawni	<i>sawni</i> 「今日」 <i>misuw</i> 「今」	<i>soni</i> 「今日」 <i>misuw</i> 「今」
朝・明日	*dama	*cama-n	*dama	*sasa-n	<i>sasan</i> 「朝」 <i>suxan</i> 「明日」	<i>sasan</i> 「朝」 <i>suxan</i> 「明日」

これは50年ほど後の Egerod 1980: 377 でも同じ形式である。この間に *sawni* における次末音節の二重母音 *aw* が *o* に変わる変化が起きた。小川 1931 において「朝」と「明日」も別の形式を用いる。*sasan* は「朝」の意味として残り、*suxan* という形式が「明日」を表す語として登場する。これは3節で見たように、数詞「一」から派生された語であることがわかっている。

また、「さっき」について小川 1931 の時点では、アタル祖語を引き継ぐ *sawni* という形式を用いていた。この時点では、*sawni* は「さっき」も「今日」も意味する。ほぼ50年後、Egerod 1980: 376-377 では「さっき」は、*misan* という形式で挙げられている。これは改新的な形式と考えられ、本来「さっき」を表した形式である *sawni* から置き換わった。この置き換わりの背景として、「さっき」と「今日」が同じ形式になった(表4ではアタル祖語後期の段階)ことがあるのではないだろうか。これらの意味を区別しようとする働きが生じ、「さっき」のほかに新たな語である *misan* を取り入れたのではないか<sup>23)</sup>。

## 6. おわりに

以上、アタル語における「朝」の語源について、その他の時を表す語「さっき」「昨日」「明日」「今」「今日」「あとで」などとともセデック語の同源語と比較し、それをもとに形式的、意味的変遷を考察した。

セデック祖語において「今・今日」を意味する \*saða を基にアタル祖語に再建される「今・今日」は、\*sasa という形式である。この形式に時を表す接尾辞がついて *sasa-an* が生じ、母音連続から一つ母音が脱落し *sasa-n* に変わった。そして、この *sasa-n* は本来の「今・今日」の意味から「朝・明日」の意味へ移行する(5節)。この推移は、時を表す語 \*sawni 「さっき」の意味的拡張に推されたものである。\*sawni は「さっき」から「今日の朝」をも意味するようになり、さらには「今日(全体)」を表すようになった(4節)。そのため、本来「今日」を表した *sasa-n* が、時間的に未来へ移行し「朝・明日」を意味するようになった。

その後、アタル語において *sasa-n* は「朝」のみを表すようになる。そして「明日」を表す語として新たに用いられるようになったのが、*suxan* であり、これは数詞として「一」を表す語根 *xa* から派生された(3節)。

22) アタル語において *sawni* が「さっき」と「今日」のほかに「今」をも表していたことを小川 2006: 244 は記録している。小川 2006: 244 は佐佐木 1918 を参照し、そこには「今日、今、今しがた、先程」という意味が載っているとす。

23) *misuw* という形式は小川 1931: 189 では「すぐさま」の意味で挙げられている。そのため本来「すぐに、直後に」を意味した語が、「今」に変わった可能性がある。

## 参考文献

- Blust, Robert. 2013. *The Austronesian languages*. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.
- Blust, Robert and Stephen Trussel. 2010. *The Austronesian comparative dictionary, web edition*. <http://www.trussel2.com/acd> [Accessed August 2021].
- Egerod, Søren. 1980. *Atayal-English dictionary, vol. 1-2*. London: Curzon.
- 原住民族委員會 2013 『原住民族語 E 樂園』 <http://web.klokah.tw/> [2021年8月アクセス].
- Huang, Lillian M. 1995. *A study of Mayrinax syntax*. Taipei: Crane.
- Li, Paul Jen-kuei. 1981. "Reconstruction of Proto-Atayalic phonology." *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica*, 52(2): 235-301.
- . 1982. "Male and female forms of speech in the Atayalic group." *Bulletin of the Institute of History and Philology*, 53(2): 265-304.
- . 1985. "The position of Atayal in the Austronesian family." *Austronesian linguistics at the 15th Pacific Science Congress* (Andrew Pawley and Lois Carrington, eds.), 257-280, Canberra: Pacific Linguistics.
- 李壬癸 1996 『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭縣政府。
- 森丑之助 1917 『臺灣蕃族志』第一卷。臨時臺灣舊慣調査會。
- 落合いづみ 2015 「セデック語バラン方言の二重母音について」『日本言語学会第150回大会予稿集』日本言語学会編, 392-397, 日本言語学会。
- . 2020 「アタヤル語群における「肩」の再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』100: 141-153.
- Ochiai, Izumi. 2018. "Ryuzo Torii's Paran Seediq Glossary (1900): Annotation and observation." *UST Working Papers in Linguistics*, 10: 113-143.
- . 2019. "'Morrow' in Seediq." *The Kobe Gaidai ronso*, 70(1): 131-144.
- . 2021. "Reconstruction of 'one' in Proto-Atayalic: In connection with 'ten' in some Formosan languages." *Journal of the Center for Northern Humanities*, 14: 55-69.
- 小川尚義 1931 『アタヤル語集』台湾総督府。
- . 1939 「時に関する高砂族の語」『民族学研究』5(1): 1-14.
- . 2006 『臺灣蕃語蒐錄』李壬癸・豊島正之編, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 小川尚義・浅井恵倫 1935 『原語による臺灣高砂族傳説集』台北帝国大学言語学研究室。
- Pecoraro, Ferdinando. 1977. *Essai de dictionnaire Taroko-Français*. Paris: Société pour l'Etude et la Connaissance du Monde Insulindien.
- Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編 2006 『太魯閣族語簡易字典』秀林郷：秀林郷公所。
- 佐佐木達三郎編 1918 『國語びき北蕃語辭典』台湾総督府。
- 佐山融吉編 1983a [初出1918] 『蕃族調査報告書：大么族前編』南天書局。
- . 1983b [初出1920] 『蕃族調査報告書：大么族後編』南天書局。
- 鳥居龍藏 1900 「臺灣埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』176: 71-74.
- . 1901 「臺灣埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』178: 133-137.
- 月田尚美 2009 「セデック語（台湾）の文法」東京大学博士論文。
- 移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 1935 『臺灣高砂族系統所屬の研究』台北帝国大学土俗・人種学教室。
- Zeitoun, Elizabeth, Stacy Fang-ching Teng, and Raleigh Ferrell. 2010. "Reconstruction of '2' in PAN and related issues." *Language and Linguistics*, 11(4): 853-884.

採択決定日—2023年1月30日